

板付 9

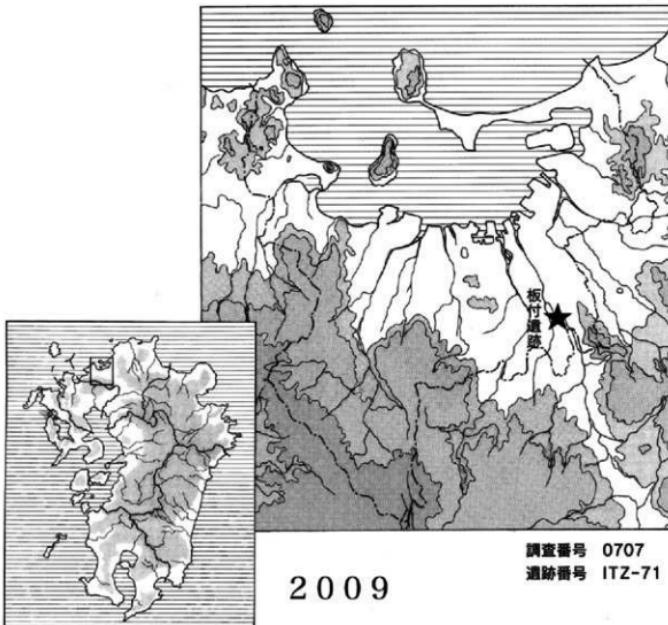
—板付遺跡 第71次調査の報告—

2009

福岡市教育委員会

板付 9

— 板付遺跡 第71次調査の報告 —



福岡市教育委員会

序

福岡市は、豊かな自然環境と地理的条件にも恵まれ、古くから大陸の先進文化を受け入れる窓口として栄えてきました。市内には最古の稻作の村である板付遺跡、古代の迎賓館である鴻臚館、貿易都市博多などの貴重な文化財が残されています。福岡市教育委員会では、開発工事に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存と保護措置に努めているところです。

本書で報告いたします板付遺跡周辺は稻作発祥の地として全国でも特に有名な遺跡であり、これまでに弥生時代から古墳時代にかけての住居などが調査されており、稻作が我が国に定着し、発展を示す貴重な遺構がみつかっています。

今回の調査でも弥生時代の集落を巡る溝などが発見され、この時代の歴史を解明する上でたいへん貴重な発見となりました。

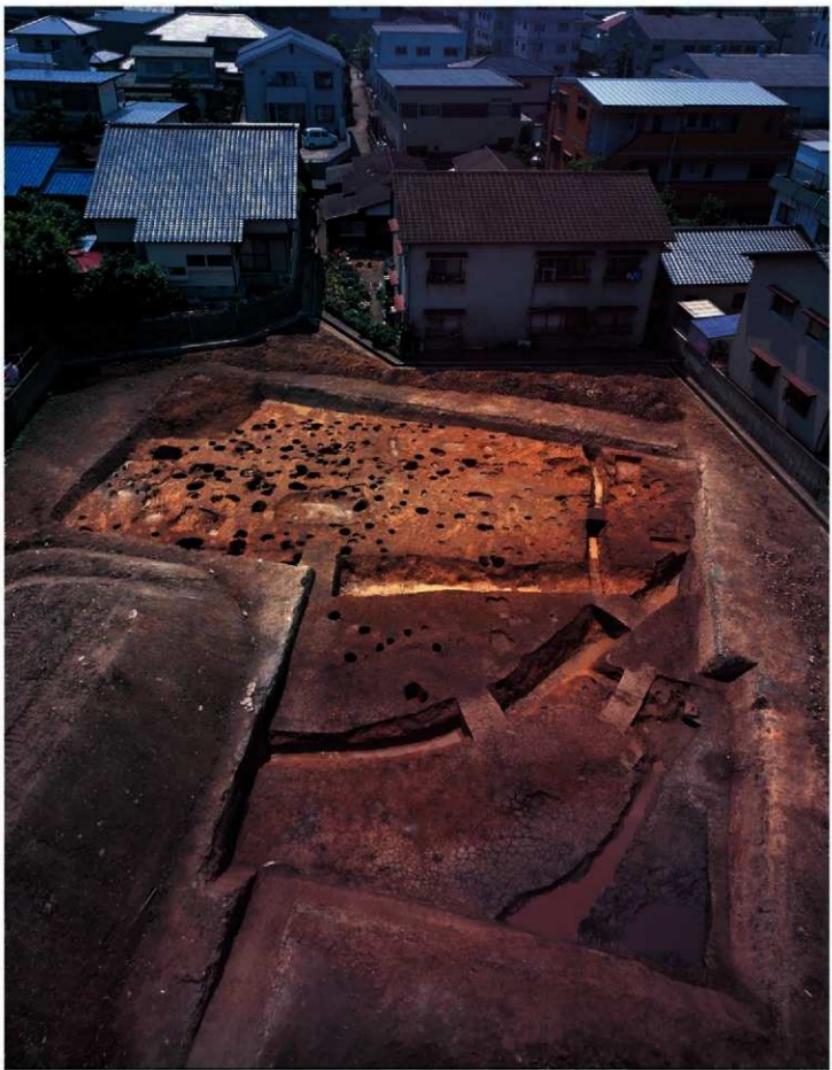
本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の費用負担をはじめとして多大なご協力を賜りました株式会社アクシア・ユニオン様に厚くお礼申しあげます。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣



例　　言

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成19(2007)年度に博多区板付5丁目地内で、実施した板付遺跡第71次調査の発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は福岡市教育委員会の加藤隆也が行った。
- (3) 遺構実測は加藤が、写真撮影は力武卓治と加藤が行った。
- (4) この報告書の執筆・編集は加藤が行い、第Ⅲ章4は同文化財部の吉留秀敏が執筆した。
- (5) 出土遺物の整理作業は加集和子、田中由紀が行った。
- (6) 出土遺物の実測と写真撮影は加藤が行い、浮書は加集が行った。
- (7) 本書に使用した方位は磁北であり、今回の調査・報告に係る標高は道路台帳平面図上による調査地前面道路高9.5mを基準として使用した。
- (8) 溝断面の土層剥ぎ取り作業は埋蔵文化財センターの協力を得た。
- (9) 調査に係る記録類、出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵・保管し、活用されていく予定である。
- (10) 現在、本市刊行の板付遺跡調査報告書で使用している書名では実状を異にし、混乱をきたす恐れがあるため、今回書名の整理をおこなった。以下のとおりである。

本市刊行板付遺跡調査報告書

	書　　名	集　数	刊行年
板付 1	板付遺跡調査報告	8	1970
	板付周辺遺跡調査報告書 - I -	29	1974
	板付周辺遺跡調査報告書(2)	31	1975
板付 2	板付 市宮住宅建設に伴う発掘調査報告書 1971-1974	35	1976
	板付周辺遺跡調査報告書(3)	36	1976
	板付周辺遺跡調査報告書(4)	38	1977
板付 3	板付 県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書	39	1977
板付 4	板付 県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書(2)	48	1978
	板付遺跡調査概報 板付周辺遺跡調査報告書(5) 1977～8年度	49	1979
	板付周辺遺跡調査報告書(6)	57	1980
	板付周辺遺跡調査報告書(7)	65	1981
板付 5	板付 板付会館建設に伴う発掘調査報告書	73	1981
	板付周辺遺跡調査報告書(8) 1981年度調査概要	83	1982
	板付周辺遺跡調査報告書(9) 1982年度調査概要	98	1983
	板付周辺遺跡調査報告書(10) 1984年度調査概要	115	1985
	板付周辺遺跡調査報告書(11) 下水道工事に伴う調査 (1984・85年度)	135	1986
	板付周辺遺跡調査報告書(12)	154	1987
	板付周辺遺跡調査報告書(13) 下水道工事に伴う調査 (1986年度)	171	1987
	板付周辺遺跡調査報告書(14) 1987年調査	206	1989
	板付周辺遺跡調査報告書(15) 高畠遺跡第12次調査地点	210	1989
板付 6	国史跡板付遺跡環境整備報告書	314	1991
	板付周辺遺跡調査報告書(16) F・5・1調査地点	362	1994
板付 7	環境整備遺構確認調査 板付遺跡	410	1995
板付 8	史跡 板付遺跡 環境整備報告	439	1995
	下月隈天神森III下月隈遺跡2・3次調査、下月隈C遺跡1次調査、板付遺跡66次調査	457	1995
	板付周辺遺跡調査報告書(17)	494	1996
	板付周辺遺跡調査報告書第18集	539	1997
	板付周辺遺跡調査報告書第19集	567	1998
	板付周辺遺跡調査報告書第20集	601	1999
	板付周辺遺跡調査報告書第21集	640	2000
	板付周辺遺跡調査報告書第22集	680	2001
	板付周辺遺跡調査報告書第23集	716	2002
	板付周辺遺跡調査報告書第24集 板付遺跡第50・56次調査報告書	717	2002
	板付周辺遺跡調査報告書第25集 板付遺跡 第68次調査	718	2002

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 達構と遺物	7
3. まとめ	12
4. 旧石器時代の遺物	13

挿図目次

Fig. 1 板付遺跡と既調査地点図 (1/4,000)	2	Fig. 7 土層堆積状況実測図 (1/60, 1/40)	9
Fig. 2 調査地周辺の調査状況図 (1/800)	4	Fig. 8 SD-01出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig. 3 板付71次達構位置図 (1/150)	6	Fig. 9 SD-02出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig. 4 SE, SK実測図 (1/40)	7	Fig. 10 取・排水溝出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig. 5 SE-01出土遺物実測図 (1/3, 1/8)	8	Fig. 11 遺物包含層出土遺物実測図 (1/3)	11
Fig. 6 SP出土遺物実測図 (1/3)	8	Fig. 12 旧石器時代の遺物実測図 (1/1)	13

図版目次

PL. 1 1) 南側調査区発掘状況 (南西から)	2) SD-01, 02切り合ひ状況 (北から)
PL. 2 1) SD-01土層堆積状況 (南西から)	2) SD-01調査区東壁土層状況 (西から)
PL. 3 1) SD-02土層堆積状況 (北東から)	2) 取・排水溝検出状況 (北西から)
PL. 4 1) 取・排水溝土層堆積状況 (南東から)	2) 取・排水溝完掘状況 (南東から)
PL. 5 1) SD-03完掘状況 (北から)	2) 調査区東壁状況 (北西から)
PL. 6 1) 北側調査区達構検出状況 (南から)	2) 北側調査区達構掘削状況 (南から)
PL. 7 1) 北側調査区達構掘削状況 (北から)	2) SK-01掘削状況 (東から)
PL. 8 出土遺物 (縮尺不同)	
PL. 9 出土遺物 (縮尺不同)	

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成14年9月27日付けで、埋蔵文化財調査前審査係宛に福岡市博多区板付5丁目7-5他の土地売買に先立って、埋蔵文化財の有無についての照会が提出された。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である板付遺跡内にあるため、11月19日調査を行った。その結果現地表下約0.8mのローム層上面にて溝、柱穴などの遺構が遺存していることを確認した。その後、株式会社アクシア・ユニオン様から当該地に共同住宅建設の計画が行われ、この結果をもとに協議を重ねたが、工事によってやむを得ず破壊される部分について、発掘調査を行い記録保存することとなった。発掘調査は平成19年4月26日から着手し、6月2日に市民向けに現地説明会を行い、6月14日に調査を終了した。

発掘調査から整理・報告に至るまで、株式会社アクシア・ユニオン様をはじめ関係者の皆様からご理解をいただきと共に、多大なご協力を賜り順調に作業が進み報告書を作成することができました。ここに記して謝意を表します。

2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査委託者	株式会社アクシア・ユニオン		
調査主体	福岡市教育委員会		
調査総括	文化財部埋蔵文化財第2課長	力武卓治（前任）	田中壽夫（現任）
事務担当	埋蔵文化財第2課第1係長	杉山富雄	鈴木由喜（前任）
調査担当	文化財管理課	井上幸子（現任）	加藤隆也
調査作業	埋蔵文化財第2課	池田 隆 石川幸子 今村由利 北野宏行 近藤英彦 坂下達男 鎌山幸義 田中トミ子 濱口長治 米良恵美 元澤慶寛 山中征生 結城敦雄 結城フデコ	加集和子 田中由紀
整理作業			

遺跡調査番号	0707	遺跡略号	ITZ-71
地番	福岡市博多区板付5丁目7-5他	分布地図番号	板付24
開発面積	1,312.35m ²	調査面積	540m ²
調査期間	平成19年4月26日～平成19年6月14日		

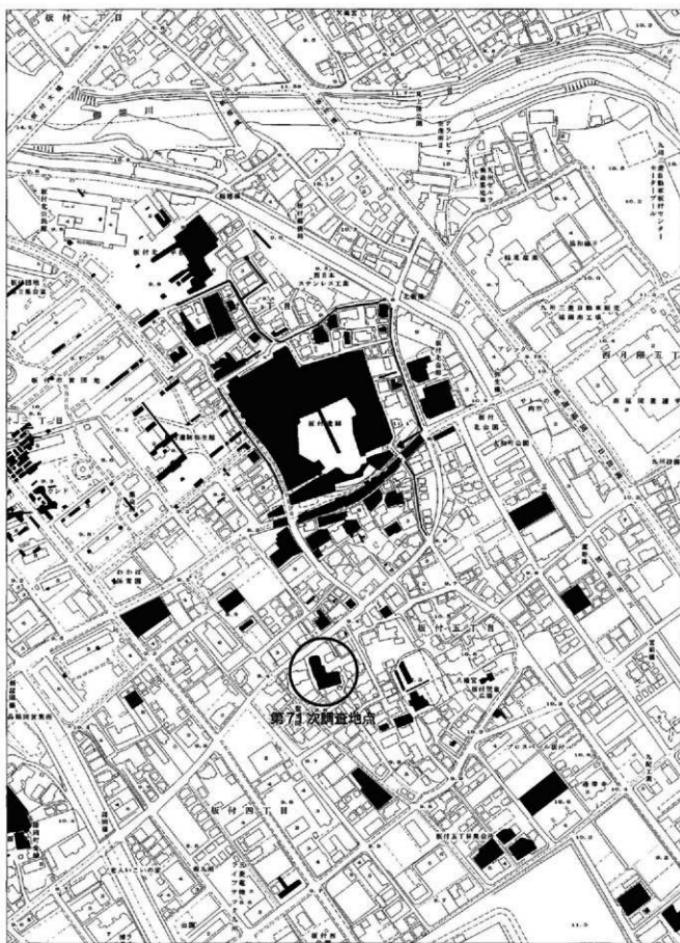


Fig. 1 板付遺跡と既調査地点図 (1/4,000)

第II章 遺跡の立地と歴史的環境

福岡平野は、平野東部を北流する御笠川と平野中央部を北流する那珂川によって形成されている。両河川の中流域から上流にかけては多くの支流があり、各支流間には南北に延びる中・低位段丘が多くみられる。現在の御笠川は中流域で支流である諸岡川と分岐し、大きく東側へ蛇行しており、板付遺跡はその御笠川と諸岡川に挟まれた中位段丘Ⅱ面とその周辺沖積地に立地する。

板付遺跡は、南北約500m、東西約120m、頂部標高10～20mの中位段丘Ⅱ面上に位置し、2つの鞍部を挟み、3箇所の台地部に分けられる。それぞれ北台地、中央台地、南台地と呼称され、環濠を中心とする国指定史跡板付遺跡はこの中央台地に位置する。

板付遺跡の台地部周辺の沖積地では、中央台地の西側と東側で水田施設の一部が確認されている。中央台地の西側沖積地、環濠から南西約50mに位置する調査地点、及び県道調査区で突帯文土器単純期、板付Ⅰ式期の水路、井堰、水口、畦畔が検出されている。この中で突帯文土器単純期の水路（幅約2m、深さ約1m）は台地西側縫辺を北流し、その取・排水は、この水路より西方約80mに北流する旧諸岡川に求められると推定されている。板付Ⅰ式土器期の水路も前代同様、西側縫辺を北流する方向で検出された。更に、中央台地と南台地の鞍部や中央台地の東側沖積地に位置する調査地点でも、この時期の水路が検出され、台地東側沖積地の開拓が考えられている。

本遺跡を中心にして周辺の遺跡を概観してみると、南方約2kmにはこれと対峙して、明治32年に発見された櫛棺内より前漢鏡30余面、銅劍、銅矛などが出土した須恵岡本遺跡を含む春日丘陵からの低台地がある。ここから博多駅にかけての範囲は奴国の中心地と言われているところである。そのほぼ全域に遺跡が分布しており、須恵永久遺跡、須恵本造跡、須恵唐梨遺跡、岡本パンジヤク遺跡、赤井手遺跡、大谷遺跡等からは青銅器工房関連遺構がみつかっている。春日丘陵より北東側に繋がる低台地上には、ナイフ形石器などを主体とする旧石器時代遺物をはじめとして弥生時代から古代にかけての遺構や遺物がみられる南八幡遺跡、雜餉隈遺跡などが点在している。西南方の井尻低台地上には井尻B遺跡・五十川遺跡などが位置している。井尻B遺跡では30数次におよぶ調査が行われており、第2・6・12次調査からは旧石器代遺物が出土し、第6次調査では鏡と鎌の鏡型が出土するなど弥生時代から古墳時代の集落が広く分布している。また古代以降の井尻庵寺関連遺構なども注目されている。その北側、本遺跡からは北西の方には比恵、那珂遺跡がある。旧石器時代遺物の散布もみられるが、弥生時代中期から古墳時代初期にかけて計画的な「街区」の形成がみられ、「交易センター」としての都市化がおこなわれたと考えられている。

御笠川以東では、四王寺山塊より北へ延びる月隈丘陵の尾根・山麓部における遺跡の分布は濃厚であり、特に金隈遺跡、上月隈遺跡、下月隈遺跡、月隈宝満尾遺跡では袋状貯蔵穴や土壙墓が確認され、銅鏡や玉類が出土している。なお金隈一帯の尾根上には群集墳として知られる持田浦古墳群が広がっている。福岡空港内にある沖積高地上に位置する翁居遺跡からは刻目突帯文土器期から前期にいたる集落や墓地がみつかり多量の木製品が出土した。また、礎板を有する大型掘立柱建物をはじめ弥生時代後期の遺構・遺物も豊富にみつかっている。

最後に、西側の諸岡川を挟んだ近接地には、諸岡遺跡が位置している。旧石器時代遺物の散布から弥生時代の集落、墓地などの調査がおこなわれておらず、朝鮮系無文土器や貝輪等の貴重な遺物が出土している。

周辺の調査状況

47次調査地点 道路を挟んだ北側30mに位置する。緩やかに弧を描く幅3.5～5.0mの溝が検出されている。出土遺物は少ないが板付Ⅰ式段階に掘削され、板付Ⅱ式段階まで存続していたと考えられている。水の流れは西向きであり、南北台地の鞍部を貿流する流路からの支流と考えられている。

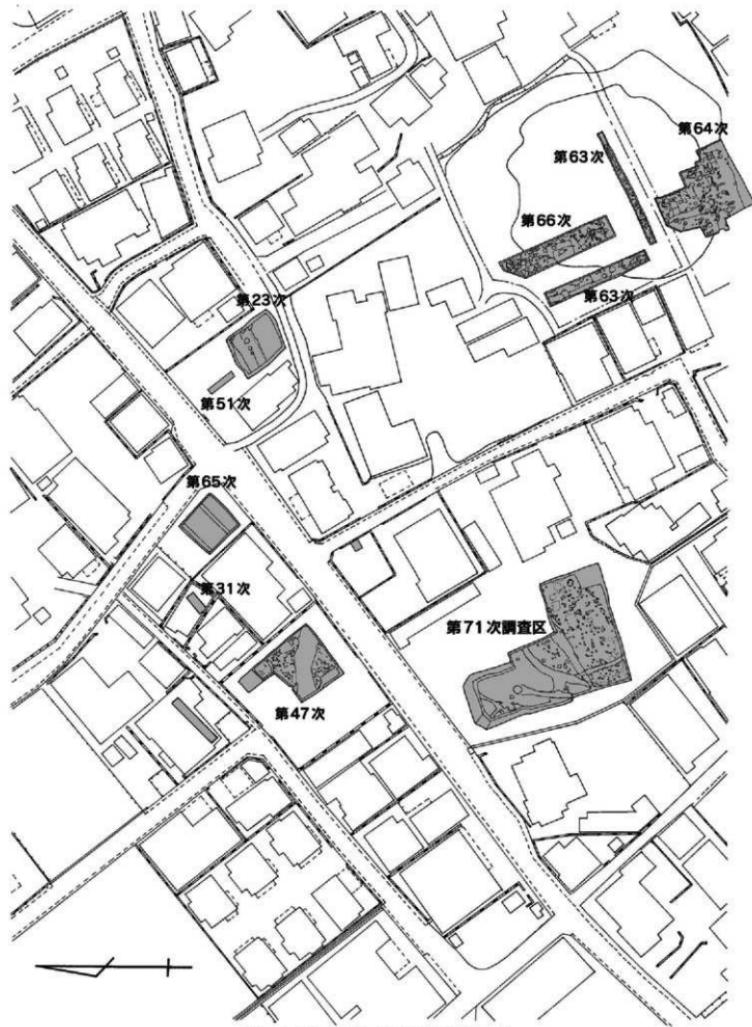


Fig. 2 調査地周辺の調査状況図 (1/800)

31次調査地点 北東方向約20mに位置する $2.5 \times 4.2\text{m}$ のトレンチによる小面積の調査区である。地山は地表面下1.4mの青灰色粘土（八女粘土）まで削られており、前期末～中期の土器が出土。生活遺構は無く、台地間の鞍部と考えられる。

65次調査地点 調査地から北東方向に約50m離れた地点に位置する。現地表1.2mの掘削で砂層と粘質土層の互層となり、湧水が激しくなりそれ以上の掘削ができなかった。堆積の傾斜は東向きであった。以上のことから、板付中央台地の外環濠部分に位置すると考えられている。

51次調査地点 23次調査地点の北側約5m地点である。鞍部の中に入っており、出土遺物から鞍部の埋没時期が弥生時代中期後葉と考えられる。

23次調査地点 調査地から東北東方向に約70m離れた地点に位置する。鞍部を西に向かって流れる溝状遺構を検出している。出土遺物は、祭祀用土器である丹塗磨研土器を含む弥生時代中期遺物が主体であり、当該期にも水の流れがあったことがうかがえる。

63、64、66次調査地点 この地点は、調査地から南東方向約80mの南台地最高所地の調査である。柱穴、土壙、住居跡など多くの遺構がみつかったが弥生前期の遺物は無く、その時代は弥生時代後期をピークとして中期後半から古墳時代にかけての遺構・遺物を検出している。また、近世遺物も出土しており、福岡藩二代藩主黒田忠之が建てたといわれる「行館」ではないかと推察されている。

第III章 調査の記録

1. 調査の概要

4月26日(木)に重機を搬入したが、既存建物の解体工事が終了していなかった。調査地内での廃土の一括処理は難しく、場内で廃土反転での調査であるため、最初の調査区を極力広く開けなければならない状況であったが、結局排土置き場が確保できず、表土剥ぎをその日は断念した。改めて解体工事が完全に終了した5月1日、2日の両日で表土剥ぎ作業をおこない、現在の調査区をあけた。作業員は5月2日から作業を開始した。

遺構検出作業の結果、調査区のほぼ中央を東西に中世後半以降の直線的な溝がみられ、その南東側の地山は、鳥栖ロームの下層がむきだしになっており、地盤が大きく削られていることがわかった。その範囲は近現代の擾乱、植生による痕跡に混じり、中世期以降の柱穴がみられた。それ以前の遺構は、弥生時代の中期後半の井戸1基のみであった。

調査区の北側と西側は緩やかに低く傾斜しており、調査区南東部に比べれば後世の削平の度合いが少ないようである。そこで確認されたのが、板付南台地の裾を等高線に平行して緩やかに溝曲して流れる断面V字を呈する溝である。溝幅約2m、深さ1mを測るこの溝の下層には粗砂が堆積しており、一定の水の流れを示している。出土遺物は絶じて少ないが土器蓋、壺口縁、甕底部など弥生時代中期後半の特徴をもつものが溝下層においてもみられた。また、東側調査区壁の観察により、弥生時代中期の遺物を含む遺物包含層を切って溝が掘削されている状況がみられ、その時期を大きく遡るものではないと考えられる。これらの遺構は、国指定史跡である板付遺跡を有する地域の歴史に対する関心度の高さと、水路や水口の構造が良好に遺存していたこともあり、その後の村の発展を考える上で学術的にも貴重であると考え、6月2日(土)に現地遺跡説明会を開催することが協議の結果決定された。150名を超える地域や市民の方々に集まっていた。その後、廃土を反転させ北側調査区を設定し、掘削を行った。緩やかに北側に傾斜しており、溝・土壤などを検出した。記録作業を行った後、平成19年6月14日に発掘調査を終了した。

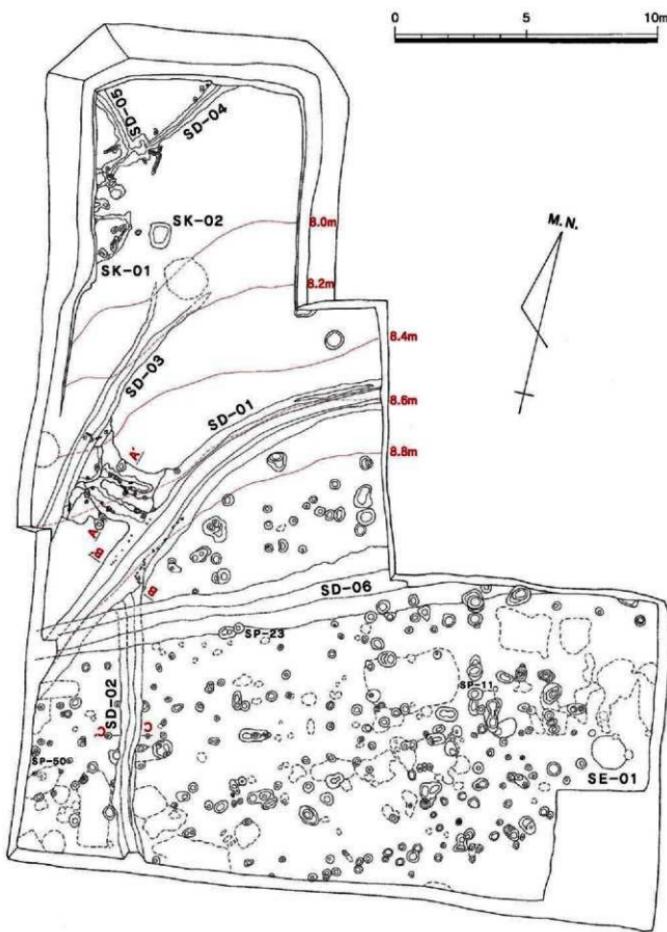


Fig. 3 板付71次遺構配置図 (1/150)

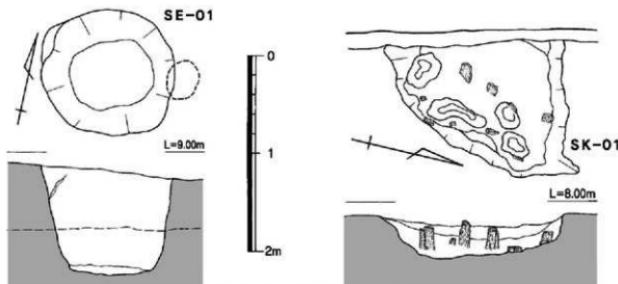


Fig. 4 SE, SK実測図 (1/40)

2. 遺構と遺物

井戸 (SE)

今回の調査では、1基の井戸を検出した。

SE-01 (Fig. 4)

調査区南東部端に位置しており、平面は直徑約1.3mの梢円形を呈する。残存する深さは約1mであり、上部60cmの地山は赤褐色の鳥栖ローム下層土、下部40cmは八女粘土で礫層までは届いていない。板付台地上の井戸は通常2段階レベルでの湧水があるとされている。1段階目は鳥栖ロームと八女粘土の間、2段階目は八女粘土と礫層の間である。今回検出の井戸は第1段階レベルでの湧水を期待して掘削されたものである。湧水による壁の崩落はみられなかった。周辺に同時期の遺構はみられず、井戸としては浅いことから、後世の地形変容の歴史が反映されていると考えられる。出土遺物 (Fig. 5, PL. 8) 1は袋状口縁壺である。頸部の一部が欠損しており、袋状口縁の端部はやや斜めに歪んでいる。器壁は荒れており、胴部下端に黒斑がみられる。器高18.9cm、底径7.6cmである。2は甕の口縁破片である口縁は「く」字口縁でやや内湾し、内側の縫が明瞭である。口縁下凸部は頸部のわずか下位に、断面三角形のものが貼り付けられている。外側には荒い縦方向のハケメが残る。3は甕の胴部である。胴部上半であり、下位に凸帶一条が残る。最大胴部径は51.2cmである。壺上部約3/4が接合できたことから、打ち欠いた壺脛部片を井戸の水溜めに転用したものと考えられる。遺構の使用時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。

土壙 (SK)

調査区内には土壙状を呈するものは数基みられたが、明らかに掘削時期の新しいものや人為的な掘削が裏付けられないもののが多かった。今回は、その内2基を報告する。

SK-01 (Fig. 4, PL. 7)

調査区北側西壁際にて検出された。平面は不定形を呈しており、幅は約1.5mである。底面には小さな凹みが幾つかみられ、矢板が2列北方向に並んで打たれているのが検出された。矢板は底面まで打ち込まれて自立しており、その内側と外側の土壤に変化はみられなかつた。また横木の構造も確認できず、土留めの作用も肯定はできない。覆土の下半は黒褐色粘質土の堆積であり、常時水が溜まつ

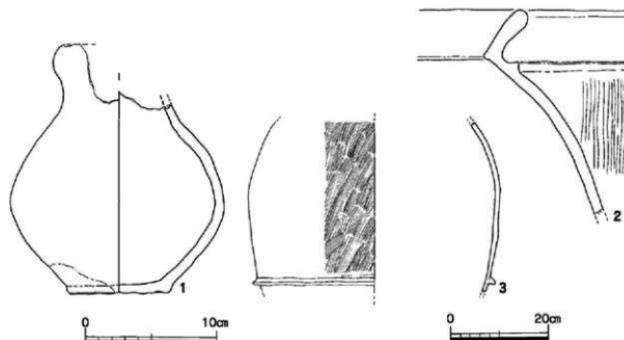


Fig. 5 SE-01出土遺物実測図 (1/3, 1/8)



Fig. 6 SP出土遺物実測図 (1/3)

ている状態であったと考えられる。北側延長線上にはやや方向は異なるがSD-04が位置する。しかし、その直接的関係は確認されていない。出土遺物は丹塗磨研土器片が3点と輕石が出土している。遺構の時代は出土遺物が少なく断定はできないが、弥生時代中期以降と思われる。

SK-02 (Fig. 3, PL. 6)

SK-01の東側で検出された土壙状遺構である。平面は長軸1m、短軸0.7mの略長方形を呈する。底面までの残存深さは約0.5mで、底は平坦である。黒褐色粘質土で均一に埋まっており、遺物は出土しなかった。遺構の性格、埋没年代等は不明である。

柱穴 (SP)

今回の調査では、300穴を数える柱穴が検出され、60穴以上の柱穴から遺物が出土した。配置状況は中世後半期以降に機能していたと考えられるSD-06と方向を一にするものが多く、建物として復元できたものはない。遺物の大半が小碎片となっているものが多く、陶器・磁器片の出土割合が高かった。出土遺物 (Fig. 6, PL. 8) 4はSP-11から出土した土鏡の口縁破片である。外器面には煤の付着が著しい。中世期の遺物と思われる。5はSP-23から出土した土瓶小皿である。全体的に器壁は厚い。口径7.2cm、底径6.3cm、器高1.6cmである。6はSP-24から出土した土瓶小皿である。全体的に薄く仕上げられており、底部外面に静止糸切り痕が残る。口径4.8cm、底径5.6cm、器高1.6cmである。6, 7は、口径が小さく近世期のものか。7はSP-50から出土した甕底部の破片である。厚底で底部中央は高い上げ底を呈する。底径3.8cmである。弥生時代中期初め頃の遺物である。

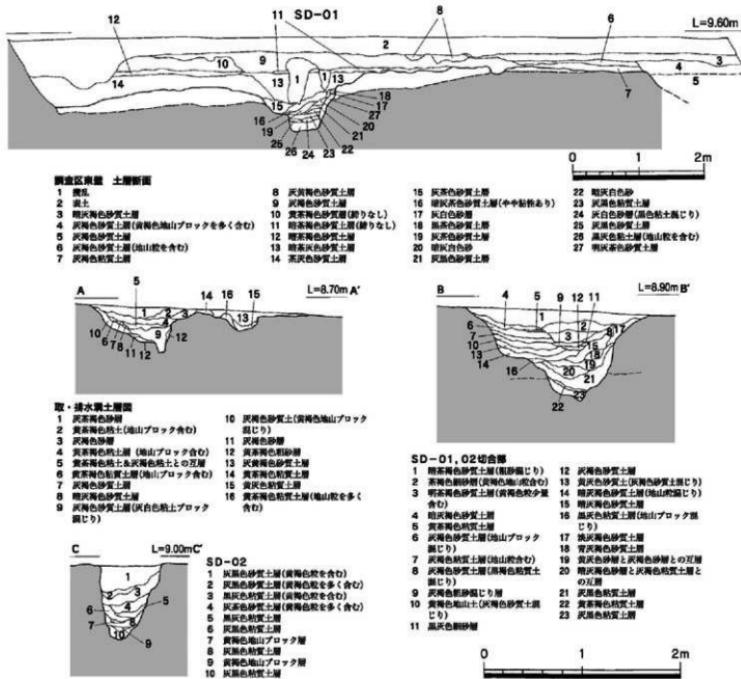


Fig. 7 土層堆積状況実測図 (1/60, 1/40)

溝 (SD)

今回の調査では、6条の溝状構造を検出した。特にSD-01とSD-02のあり方は、板付南台地の利用のされ方や、水田耕作範囲の拡大に伴う構造と技術の復元においても深く関係しており注目される。

SD-01 (Fig. 7, PL. 2)

調査区ほぼ中央部を北東側から南西方向に緩やかに弧を描いて検出された溝である。溝の曲線は、等高線ラインとほぼ平行しており、南台地の裾部を巡るものと考えられる。断面形は略U字形であり、場所によっては段を有する。検出幅1~1.9m、深さ0.5~0.9mである。調査区北側の東調査区壁の観察では、溝の上位は地山である灰白色粘土混じりの層で埋まっており、下位は黒褐色粘土で水の滲水を思わせる堆積をみせる。また最下層には茶褐色粗砂の堆積があり、相当量の水の流れがあったことがうかがわれる。西側のSD-02との切り合いで土層観察では、02の堆積が01の上位にのっ

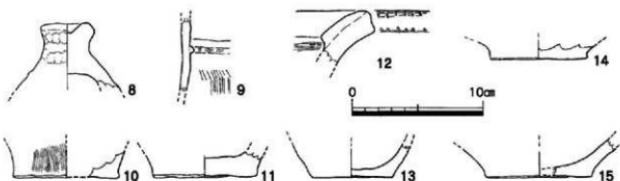


Fig. 8 SD-01出土遺物実測図 (1/3)

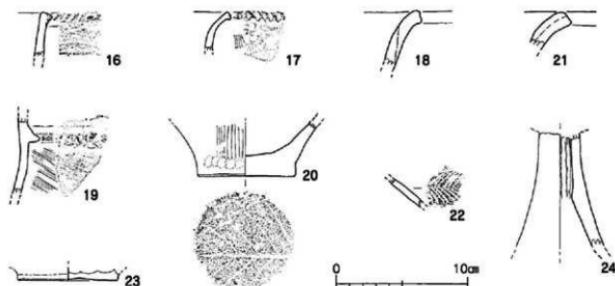


Fig. 9 SD-02出土遺物実測図 (1/3)

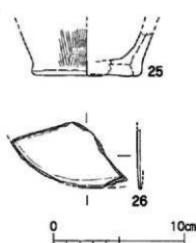


Fig. 10 取・排水溝出土遺物
実測図 (1/3)

ており、溝02の水は01を流れていたことが分かる。また、01を埋める土層の状態は東側の土層状況と大きな変化はない。また、後述するがやや西側よりには、北西方向に向けた取排水溝と考えられる施設が複数設かれている。出土遺物 (Fig. 8, PL. 8) 基本的に、あまり多くの遺物は出土していない。8は蓋形土製品の上部破片である。括れ部分には手の圧痕が残る。径は3.2 cmである。9は屈曲壺の屈曲部の破片である。屈曲はほとんどなく、断面が小さな突帯に粗い刻み目が施されている。外面器壁の調整はハケメである。10は壺底部の破片である。底径8.1cmの平底で外器面調整のハケメは裾にまで施されている。11も口径8.0cmの平底を有する壺底部片である。12は広口壺の口縁破片である。口縁端部内側の粘土帶を貼り付け豊厚させ、外側端部の上下2段に細い刻み目を施す。13～15は壺の底部破片であり、底径はそれぞれ6.2cm、7.3cm、8.1cmである。遺構の埋没時期を少ない出土遺物で決定するのは困難であるが、弥生時代前期後半とと考えられる。

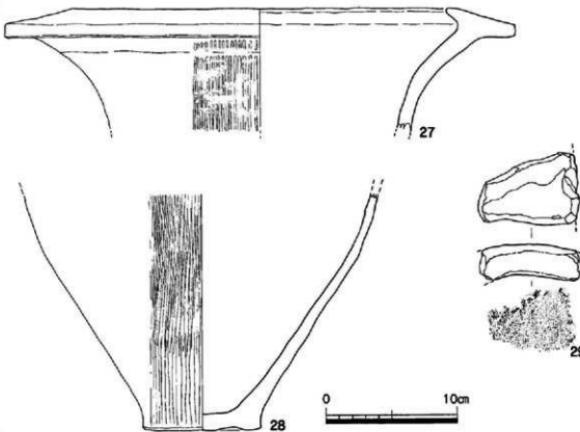


Fig. 11 遺物包含層出土遺物実測図 (1/3)

SD-02 (Fig. 7, PL. 3)

調査区南側西寄りにて検出された溝状遺構である。やや蛇行しながらN-14°-Wの方位をとる。検出幅70~90cm、深さ約80cmが残る。断面は深いU字形を呈する。両側土層断面の観察では主に茶褐色粘質土と灰黒色土で埋没しており、粗砂などの堆積はみられなかった。また、溝の掘り返しなどの状況はみられなかった。SD-01との切り合い部土層壁の観察においても基本的な埋没土に変化は無く、同様の環境の下徐々に埋没したと考えられる。出土遺物 (Fig. 9, PL. 8, 9) 基本的にあまり多くの遺物は出土していない。16~20は壺の破片である。16は直立する口縁の外側に突帯を巡らし、斜め方向の細い刻み目を施すものである。17は口縁が外湾する板付壺で、口縁端部下位に刻み目を施す。18も外湾する口縁を有するが、刻み目は施されない。19は屈曲壺の屈曲部破片である。やや尖った突帯を巡らし、刻み目を施している。20の底部外面には土器製作時に付いた木葉文が残る。底径は7.4cmで、外面器壁には粗いハケメが残る。21は広口壺の口縁破片である。口縁端部内側の粘土帯を貼り付け豎厚させている。刻み目は施さない。22は小壺の肩部破片である。羽状文がみられるが輪は通らない。23も壺底部破片で、底径は7.6cmである。24は高环の脚破片である。黄褐色を呈し胎土も密である。遺構の埋没時期は、出土遺物の中に弥生時代中期の高环脚破片が1点混じっており、遺構の切り合う状況からも混入の可能性が考えられる。土層の観察からは、溝01の上半層とほぼ同時に埋没したと考えられる。

SD-03 (Fig. 3, PL. 5)

調査区中央部西壁際にて検出された溝状遺構である。残存が悪いため取排水溝との関係は不明である。検出幅50~70cm、残存深さ約20cmである。断面は緩やかなU字形を呈する。溝は北側に向けて緩やかに傾斜しており、北側端部は削平のため確認できなくなる。黒褐色粘質土で埋まっている。

溝の掘り返しの状況はみられなかった。取排水溝と構造的に関係するのか不明であるが、溝底面に水の流れを遮るように矢板状の板を2枚打ち込んだ痕跡がみられた。出土した遺物は土器の碎片のみで時期の特定につながるものはない。

SD-04 (Fig. 3, PL. 7)

調査区北西端にて検出された溝状遺構である。溝の両端は調査区外に延びており、ほぼ直線的にN-36°-Eの方位をとり、約6m確認された。溝底面での比高差はほとんどなく流れの方向は不明である。黒褐色粘質土で埋まっており、壺の胸部破片が出土している。

SD-05 (Fig. 3, PL. 7)

調査区北西端にて検出された溝状遺構である。T字形にSD-04と連続すると考えられる。約2.5m検出した。04同様黒褐色粘質土で埋没しており、水の流れる方向も不明である。小型壺の口縁破片が出土している。

SD-06 (Fig. 3, PL. 1)

調査区のほぼ中央部を東から西に流れる溝である。直線的に掘削されており、N-66°-Eの方位をとる。検出された幅は1.3~2mであり、深さは0.4~0.7mである。この溝方向と相關する柱列が多く、建物群を画する堀のような性格であったと考えられる。出土遺物は少ないが、埋没時期は中世末から近世期と思われる。

取排水溝 (Fig. 4, PL. 4)

SD-01に敷設された施設で、水の取排水をおこなった施設と考えられる。溝は2条みられるが、遺存状態が悪く新旧関係や同時併存なのか等を土層観察では明らかにできなかった。ただ、堆積状況の観察において、埋土の中に黄褐色の地山ブロックが目立っており、止水する際につくられた畦畔の可能性が考えられる。SD-01から取水する際は水を堰きとめる必要があり、何かしらの施設が必要となるが、そのことを反映するようにSD-01の壁面に杭状の小穴がみられた。ただし頻繁に打設された状況はみられず、その密度は粗である。出土遺物 (Fig. 10, PL. 9) 25は甕の底部である。平底であり、器盤外面には荒いハケメが残る。底径8.3cmである。26は外湾刃の石包丁である。泥質真岩製で部分的に刃が遺存する。遺物からも、SD-01と同時代と考えて齟齬はないようである。

他の遺物 (Fig. 11, PL. 9)

今回の調査では、遺構検出面の上層に堆積する遺物包含層をはじめ上層から遺物が採集された。27, 28はSD-03の西側を拡張する際、遺物包含層からまとめて出土した。27は鍔先口縁の甕口縁部である外面には綫方向のミガキが残る。口径38.9cmである。28は甕の底部である。平底で器盤外面には荒いハケメが残る。底径は8.8cmである。29は瓦片である。摩滅が著しいが内面に布目が残る。

3.まとめ

今回の調査では、南台地の裾部を巡ると考えられる溝状遺構SD-01を確認することができた。弧を描くように緩やかに湾曲するこの溝の内側は元来、さらに急な勾配をもって高くなっている、弥生時代前期においても人々の活動の場となっていたと考えられるが、後世の削平のためその多くを失っている。この溝には、台地を流れる水を集め排水溝も取り付いており、排水機能を持ちながら、あ

わせて水田への取水機能も有している。本調査区北側の東西道路は、北側の第47次調査でも明らかに、中央台地と南台地間の鞍部であり、中央台地の外環濠と呼ばれる旧古川からの水が頻繁に流れる水の道であった。この溝は、その北東側の水を南台地の西側にまわそうとする意思がみられ、取水口も敷設されることから台地の西側の水田耕作を可能にすることを主目的に掘削されたと考えられる。

現在、南台地の発掘調査では後世の遺構密度が著しく、弥生時代前期段階の状況はいまだ明らかになっていない点も多い。今回の調査成果は、そのような南台地の土地利用のされ方を明らかにするとともに、中央台地を中心とする日本最古の稻作のムラである板付の発展拡散のプロセスと景観の復元に貴重な資料を提供するものとなった。

4. 旧石器時代の遺物 (Fig. 12, PL. 9)

吉留 秀敏

本調査では少量の剥片石器類が出土した。ほとんどは弥生前期に伴う黒曜石製剥片などであるが、それらに混じって2点の旧石器時代資料があった。何れも後世の開発などにより本来の包含層から離したものであるが、重要な資料でありここに報告する。

30は、溝SD-01出土の国府型ナイフ形石器である。石材はサヌカイトであり、風化が進み基部を僅かに欠損する。現存長5.4cm、幅1.8cm、厚さ0.7cmである。素材は整った翼状剥片であり、底面のボジ面からみると、本剥片はファーストフレイクから2~3回目に剥離されたものと考えられる。剥片の打撃点は打撃面全体の三分の一ほどの下の位置にある。二次調整は打撃面のみに入念に施されている。

31は、北側調査区から出土した帽子伏剥片である。石材は漆黒色良質黒曜石であり、円錐素材で剥離面の風化が進んでいる。長さ3.9cm、幅2.6cm、厚さ1.3cmである。先行剥離として背面に二面の小剥離があり、それを切り平坦打面が設けられ、本剥片は開放剥離で平坦面を作出している。本剥片には二次調整がなく、本体が石核などに利用されたと考えられる。

以上の2点の石器資料は共伴関係が不明であるが、何れも後期旧石器時代後半期に位置付けられる。このうち30の国府型ナイフ形石器は同型式としては典型例であり、福岡市では三苦、那珂、井尻B、南八幡遺跡に次いで5遺跡目の発見である。

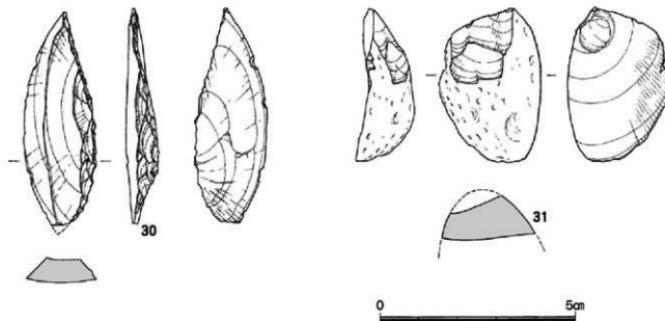


Fig. 12 旧石器時代の遺物実測図 (1/1)

発掘調査一覧

調査番号	次 数	地 点	所 在 地	調査面積(㎡)	調査開始日	調査終了日	報告書番数	
5101	1	板付2丁目	880	1951年8月17日	1951年9月31日			
6804	2	板付2丁目	120	1968年8月11日	1968年8月20日			
6907	3	板付2丁目12-16	160	1969年7月25日	1969年8月12日	8		
6910	4	板付2丁目	10	1969年7月24日	1969年8月12日			
7011	5	板付2丁目	80	1970年10月16日	1970年10月22日	8		
7102	6	板付2,3丁目	7,266	1971年8月16日	1974年6月10日	35		
7309	7	H-8	板付4丁目12-1	48	1973年7月	1973年7月	29	
7310	8	D-6-7	板付5丁目15-5	32	1973年9月	1973年9月	29	
7311	9	第2回調査	板付4丁目	68	1973年7月	1973年8月	29	
7408	10	F-9a	板付5丁目17-93	150	1974年5月20日	1974年6月20日	31	
7409	11	D-E-9	板付5丁目10-5	100	1974年6月1日	1974年6月29日	31	
7417	12		板付2丁目		1974年9月11日	1974年9月21日	杉原	
7507	13	F-8a	板付5丁目7-124	30	1975年4月23日	1975年5月23日	36	
7508	14	G-5a	板付2丁目19-6	600	1975年7月	1975年9月	36	
7606	15	G-6a	板付2丁目11-13	90	1976年5月	1976年6月	38	
7607	16	G-H-5	板付2丁目9-1	530	1976年4月9日	1976年6月21日	38	
7608	17	H-5	板付2丁目10-4	140	1976年7月	1976年10月	38	
7609	18	S005号織1次	板付2丁目	1,140	1976年7月5日	1976年8月19日	39,48	
7610	19	S005号織2次	板付2丁目		1976年10月	1976年12月	48	
7713	20	F-5a	板付2丁目12-15	80	1977年5月	1977年6月	49	
7714	21	F-7a	板付5丁目13-26	110	1977年11月24日	1977年12月	49	
7715	22	F-5b	板付2丁目12-19他	100	1977年11月	1978年1月	49	
7716	23	F-8b	板付5丁目7-15他	110	1977年11月	1977年12月	680	
7717	24	E-9a	板付5丁目7-89	6	1977年12月	1977年12月	49	
7720	25	*S005号織2次	板付5丁目				39,48	
7837	25	F-6c	板付2丁目12-10ほか	160	1978年4月	1978年4月	49	
7838	26	F-7b	板付5丁目13-26	165	1978年5月	1978年7月	49,539	
7839	27	F-6a	板付5丁目13-14	340	1978年4月6日	1978年5月15日	49,716	
7840	28	F-6b	板付2丁目12-54ほか	200	1978年7月	1978年7月	49	
7841	29	E-9b	板付5丁目13-4	80	1978年4月	1978年5月	49	
7842	30	G-7a	板付5丁目12-2	60	1978年4月	1978年9月	49,601,640	
7843	31	G-7b	板付5丁目12-1	520	1978年5月	1978年9月	49,601,640	
7844	32	F-7c	板付5丁目13-26	230	1978年4月	1978年4月	49	
7845	33	F-7d	板付5丁目13-26	90	1978年7月	1978年7月	49	
7934	34	E-5-6	板付2丁目13-13ほか	910	1979年7月9日	1979年11月4日	73	
7947	35	G-5b	板付2丁目7-24	30	1980年2月10日	1980年2月17日	65	
8136	36	E-6b	板付2丁目13-14	450	1981年2月29日	1981年4月10日	83	
8137	37	E-5c	板付2丁目12-46	50	1981年4月22日	1981年5月2日	83	
8139	38	G-8a	板付5丁目1-10	50	1981年5月26日	1981年5月30日	83	
8140	39	D-7a	板付5丁目14-3	480	1981年8月5日	1981年9月10日	83	
8223	40	F-7e	板付5丁目13-19	116	1982年6月4日	1982年6月18日	98	
8437	41	G-7d	板付2丁目1-14	370	1984年7月24日	1984年8月6日	115	
8438	42	F-7f	板付5丁目3-17	255	1984年8月9日	1984年9月17日	115	
8439	43	E-7a	板付5丁目	80	1984年9月14日	1984年9月27日	135	
8440	44	F-5d	板付2丁目	126	1984年10月27日	1985年1月31日	135	
8531	45	G-6b,F-5e	板付2丁目	135	1985年7月8日	1985年8月12日	135	
8542	46	F-5e	板付2丁目	122	1985年8月17日	1985年10月23日	135	
8607	47	H-8g	板付5丁目2-20	227	1986年5月19日	1986年6月7日	154	
8614	48	F5f	板付2丁目12-38外	56	1986年6月24日	1986年7月29日	154	
8628	49	下水埋設	板付2丁目内地	140	1986年7月28日	1986年10月1日	171	
8654	50	E8	板付5丁目7-39	83	1987年1月17日	1987年1月29日	154	
8661	51	F8f	板付5丁目17-133	5	1988年8月6日	1988年9月6日	154	
8711	52		板付4丁目4-4	200	1987年6月12日	1987年6月22日	未	
8737	53		板付2丁目10-13	120	1987年11月9日	1987年11月12日	206	
8866	54		板付2丁目	9,300	1988年12月1日	1989年3月31日	410	
8901	55	F5l	板付2丁目12-9	163	1989年4月8日	1989年4月22日	362	
8907	56	F8-9	板付4丁目19-2	720	1989年4月17日	1989年6月10日	717	
9050	60	G4-5	板付2丁目9	80	1990年11月5日	1991年1月31日	410	
9051	61	E6c	板付5丁目15-2	100	1990年12月1日	1991年1月31日	410	
9052	62	G4b	板付2丁目7-16	250	1990年12月14日	1991年1月31日	410	
9141	63		板付5丁目7-68	750	1991年11月1日	1992年3月31日	410	
9266	64		板付2丁目	1,000			410	
9270	64		板付2丁目				314	
9280		環境整備					314	
9330	65		板付5丁目12-15	100	1993年5月10日	1993年7月1日	410	
9331	66		板付5丁目7-68	1,000	1993年6月1日	1993年7月30日	410	
9424	67		板付2・3丁目内地	545	1994年6月1日	1994年8月30日	457	
9470	68	環境整備	板付2丁目	—	—	—	439	
0051	69		板付2丁目9-8	54	2000年11月20日	2000年12月12日	718	
0491	70		板付4丁目6-4	241	2005年2月9日	2005年2月10日	乍取19	

PLATES

(図 版)



調査地上空から史跡板付遺跡を望む

PL. 1



1) 南側調査区発掘状況（南西から）



2) SD-01, 02切り合い状況（北から）



1) SD-01 土層堆積状況（南西から）



2) SD-01 調査区東壁土層状況（西から）

PL. 3



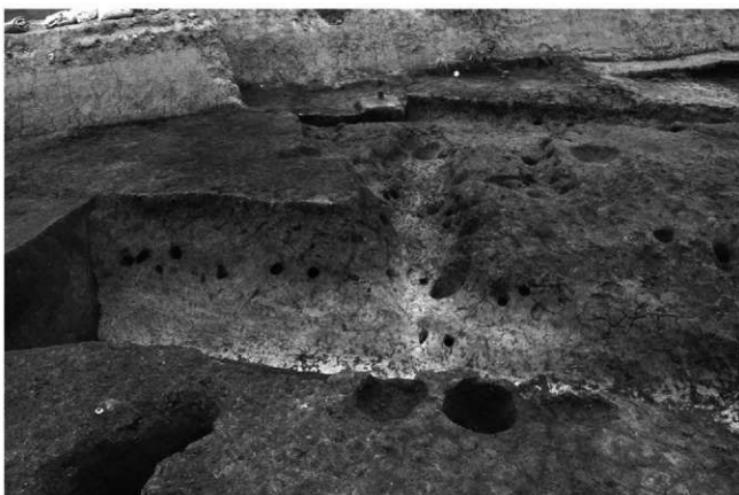
1) SD-02 土層堆積状況（北東から）



2) 取・排水溝検出状況（北西から）

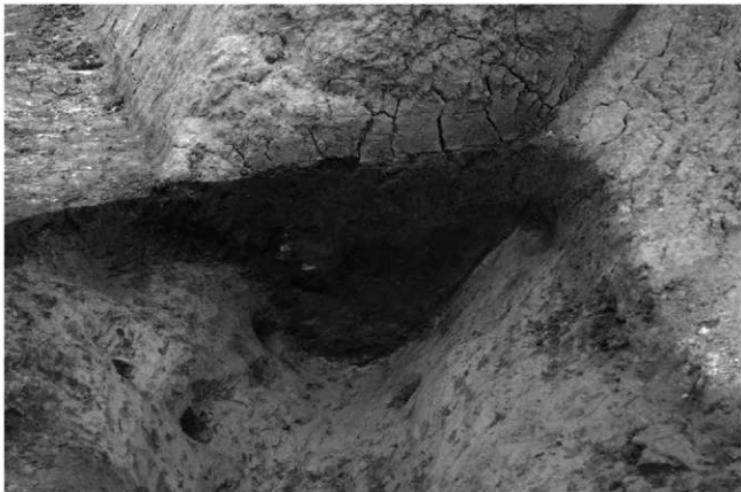


1) 取・排水溝土層堆積状況（南東から）



2) 取・排水溝完掘状況（南東から）

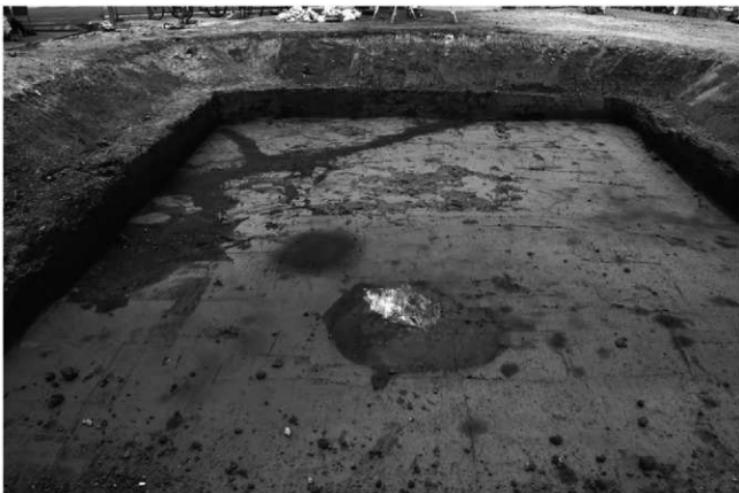
PL. 5



1) SD-03 完掘状況（北から）



2) 調査区東壁状況（北西から）



1) 北側調査区遺構検出状況（南から）



2) 北側調査区遺構掘削状況（南から）

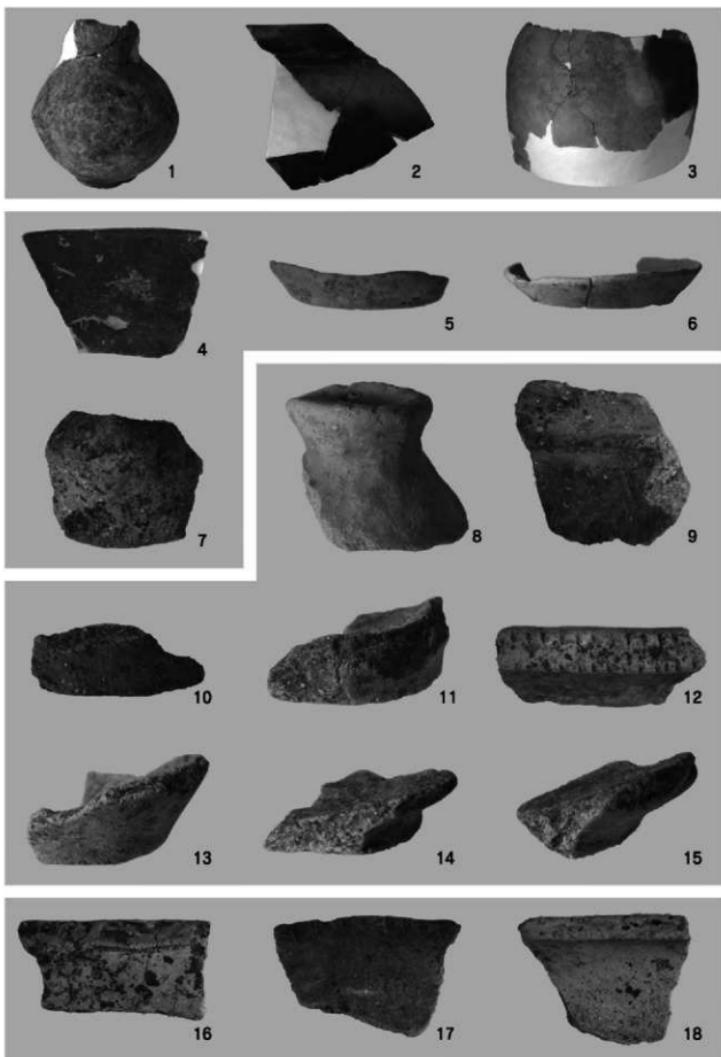
PL. 7



1) 北側調査区遺構掘削状況（北から）

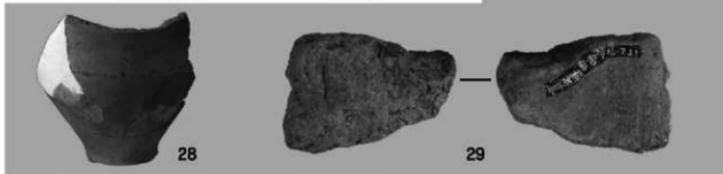
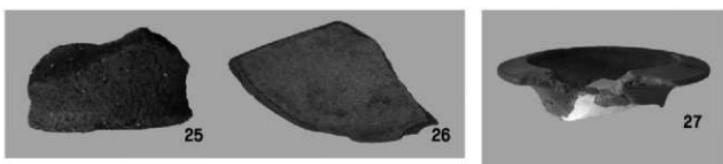
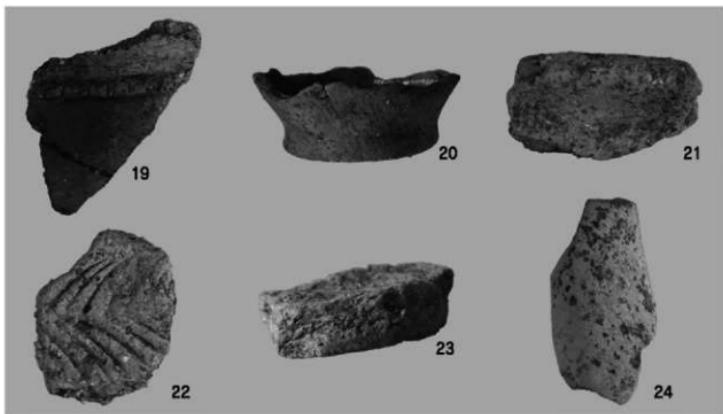


2) SK-01 挖削状況（東から）



出土遺物（縮尺不同）

PL. 9



出土遺物 (縮尺不同)

— 報告書抄録 —

書名 板付 9
ふりがな いたづけ 9
著書名 板付遺跡 第71次調査の報告
巻次
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号 第1028集
編著者名 加藤隆也
編集機関 福岡市教育委員会
発行機関 福岡市教育委員会
発行年月日 20090331
作成法人ID 40130
郵便番号 810-8621
住所 福岡市中央区天神1-8-1
遺跡名 板付遺跡
ふりがな いたづけいせき
遺跡所在地 福岡市博多区板付5丁目7-5他
市町村コード 40130 遺跡番号 0094
北緯 $33^{\circ} 33' 48''$
東経 $130^{\circ} 27' 10''$ (世界測地系)
調査期間 20070426 ~ 20070614
調査面積 540
調査原因 共同住宅建設
種別 集落
主な時代 弥生時代前期から後期
遺跡概要 弥生時代の水路、溝、集落
特記事項 台地の裾を巡る排水溝を敷設した水路

表紙 写真：調査区上空から南を望む（力武卓治撮影）

カラー図版：南側調査区全景 （力武卓治撮影）

裏表紙 上：SD-01, 02切り合ひ状況

下：取・排水溝掘削状況



横断面剥ぎ取り作業風景



建築物完成写真

板付 9

—板付遺跡 第71次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1028集

2009年(平成21年)3月31日

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

☎ 092(711)4667

印 刷 株式会社 エージェント

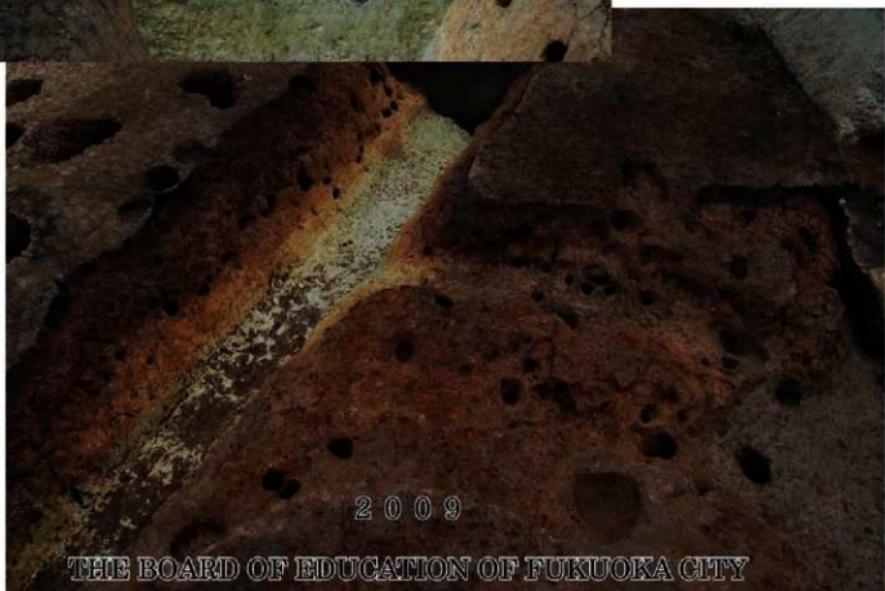
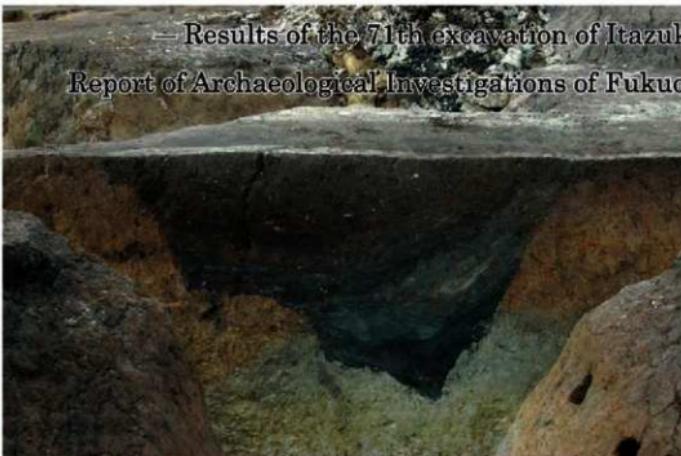
福岡市中央区高砂1丁目20-2

☎ 092(533)6006

ITAZUKE 9

— Results of the 71th excavation of Itazuke ruins —

Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.1028



2009

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY

JAPAN